

秋サケ資源調査

川 村 俊 一

調 査 目 的

青森県太平洋沿岸に來遊する秋サケ資源の來遊経路及び漁場特性を把握し、今後の秋サケ資源の適正な管理及び漁業調整施策の資料とする。

調査の内容と方法

東通村尻屋から階上町の太平洋沿岸漁協所属の漁船（10トン未満の漁船で委託期間は10月～12月）に調査を委託し、はえなわ漁法（1操業当たり15鉢以内）によって図-1に示す調査海域内で分布状況・移動回遊等について調査を実施した。

調 査 結 果

平成7年のはえなわ調査委託船の調査概要を表-1に示した。実際の操業隻数は委託隻数95隻に対し28隻であった。延べ出漁回数（隻数）は78回、総使用鉢数 684鉢、総漁獲尾数 1,085尾、推定水揚げ金額は 401,012円であった。

延べ出漁回数、総使用鉢数、総漁獲尾数は昭和61年に本試験操業を開始して以来最も少ない結果であった。

1) 海域別操業回数

調査海域毎の操業回数を図-2に示した。

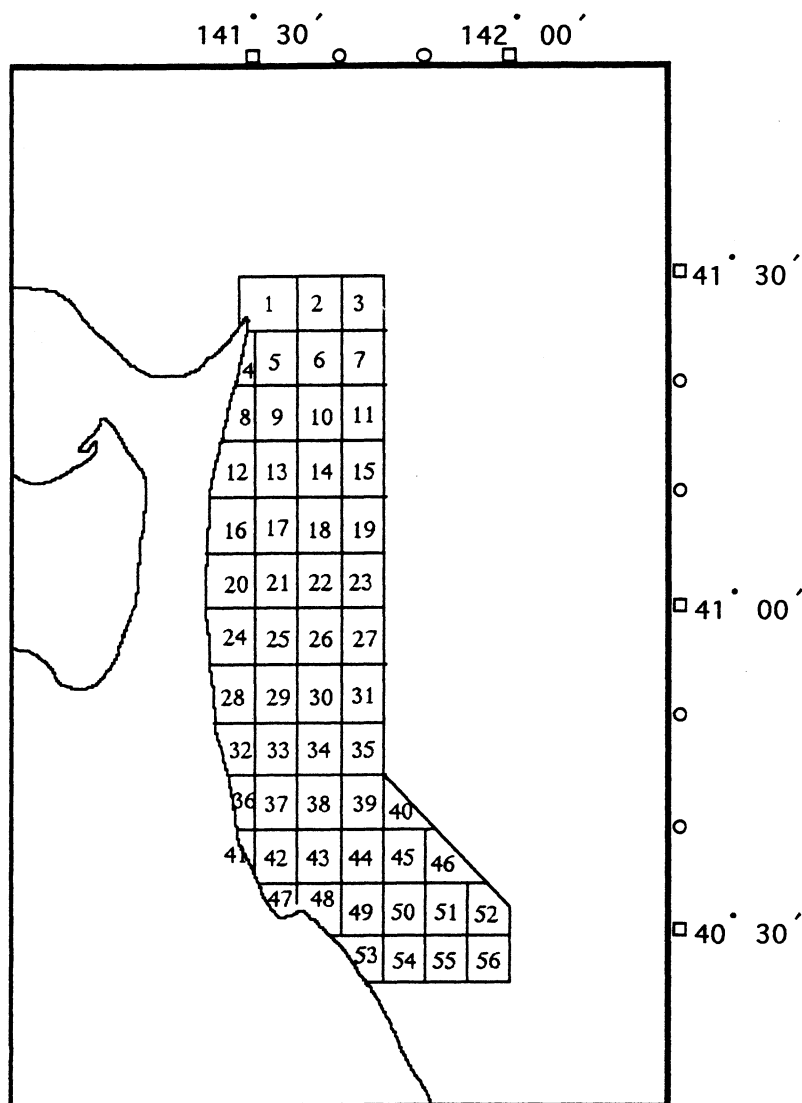


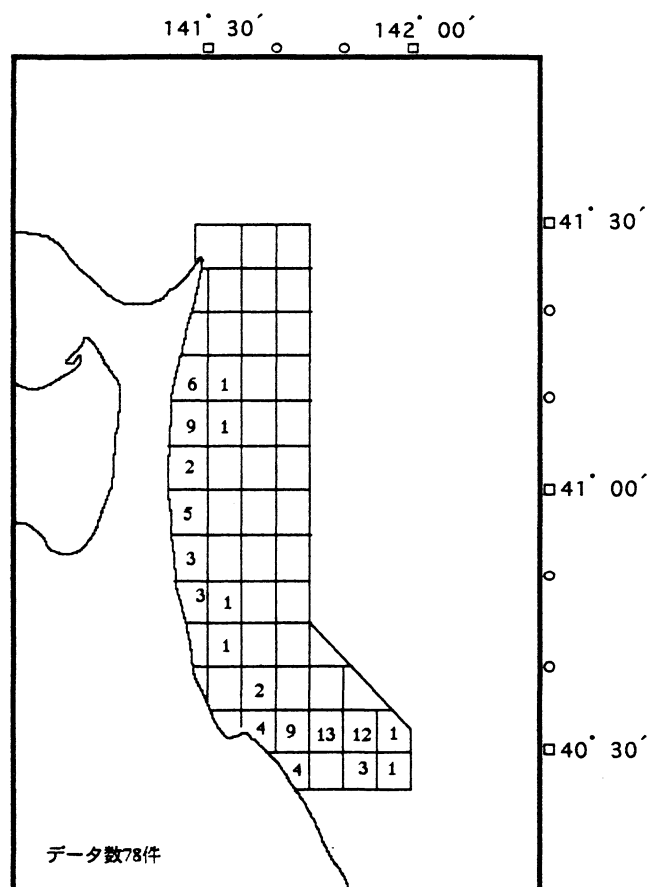
図-1 秋サケ延縄試験操業海域図

表 1 平成 7 年度秋サケ延縄試験操業結果

漁 協 名	委託隻数	出漁隻数	出 漁 期 間	延出漁日数	使用鉢数	漁獲尾数	ギン	ブナ	放流尾数	水揚げ金額
階 上	20	0	—	0	0	0	0	0	0	0
八 戸 市 南 浜	16	14	11/ 1~12/19	42	464	384	369	15	0	141,370
八 戸 鮫 浦	16	5	12/ 2~12/ 5	8	79	166	127	39	19	68,893
百 石 町	3	0	—	0	0	0	0	0	0	0
三 沢 市	3	2	11/11~12/20	7	24	129	43	86	3	32,951
六 ケ 所 村	1	0	—	0	0	0	0	0	0	0
六ヶ所村海水	4	0	—	0	0	0	0	0	0	0
泊	10	2	12/ 4~12/ 8	6	46	212	193	19	14	95,174
白 糠	22	5	11/15~12/26	15	71	194	104	90	8	62,624
合 計	95	28		78	684	1,085	836	249	44	401,012

平成 7 年の延べ操業回数はわずかに 78 回で、三沢以北の北部海域で 32 回、八戸～階上沖の南部海域で 46 回であった。

このうち、有漁割合は北部海域が 86.5% (32 / 37)、南部海域が 26.1% (12 / 46) で、南部海域では、操業を行ってもほとんど漁獲のない場合が多かった。

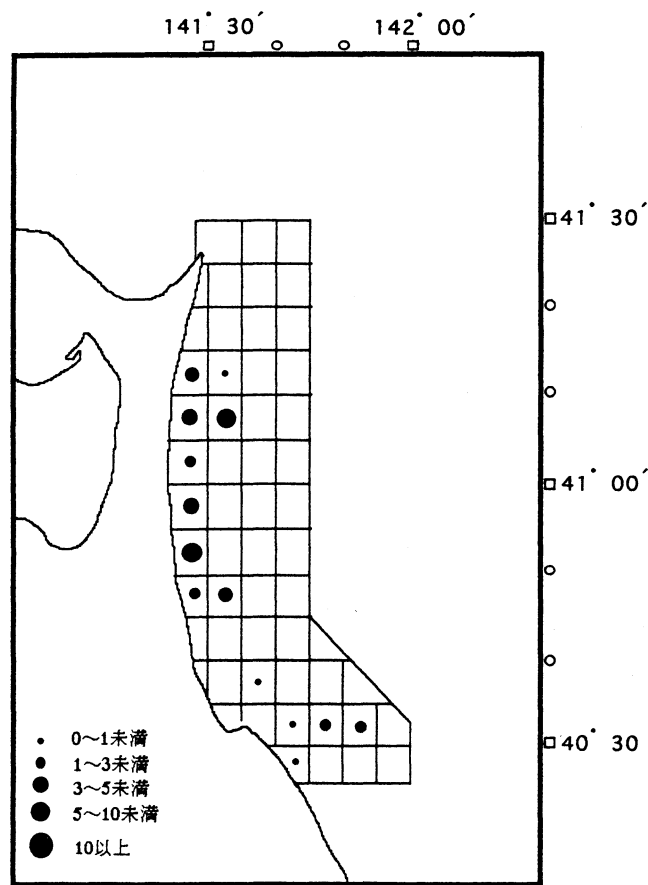


図－ 2 海域別操業回数（全期間）

2) 分布密度

図－3に海域別CPUE（1鉢当たりの漁獲尾数）を示した。CPUEの高かった海域は、北部の陸岸に近い海域に限られ、例年、密度の高い漁場が形成される南部海域では、ほとんど漁場形成がみられなかった。

また、1鉢当たり10尾以上の濃密な漁場は全海域で形成されなかった。



図－3 海域別CPUE（1鉢当たり漁獲尾数）

3) 移動回遊

図－4に海域毎の標識放流尾数を、図－5と表－2に再捕状況を示した。放流尾数は全期間を通じて44尾の放流があり、1尾の再捕報告があった。再捕された1尾は三沢沖で放流され、白糠沖で再捕されたものである。

表2 標識放流結果

標識番号	放 流 内 容		再 捕 の 結 果			
	年月日	場 所	再捕年月日	再捕の場所	海 区	方 法
570	95.12.8	28	95.12.10	青森県白糠沖	16	刺 網

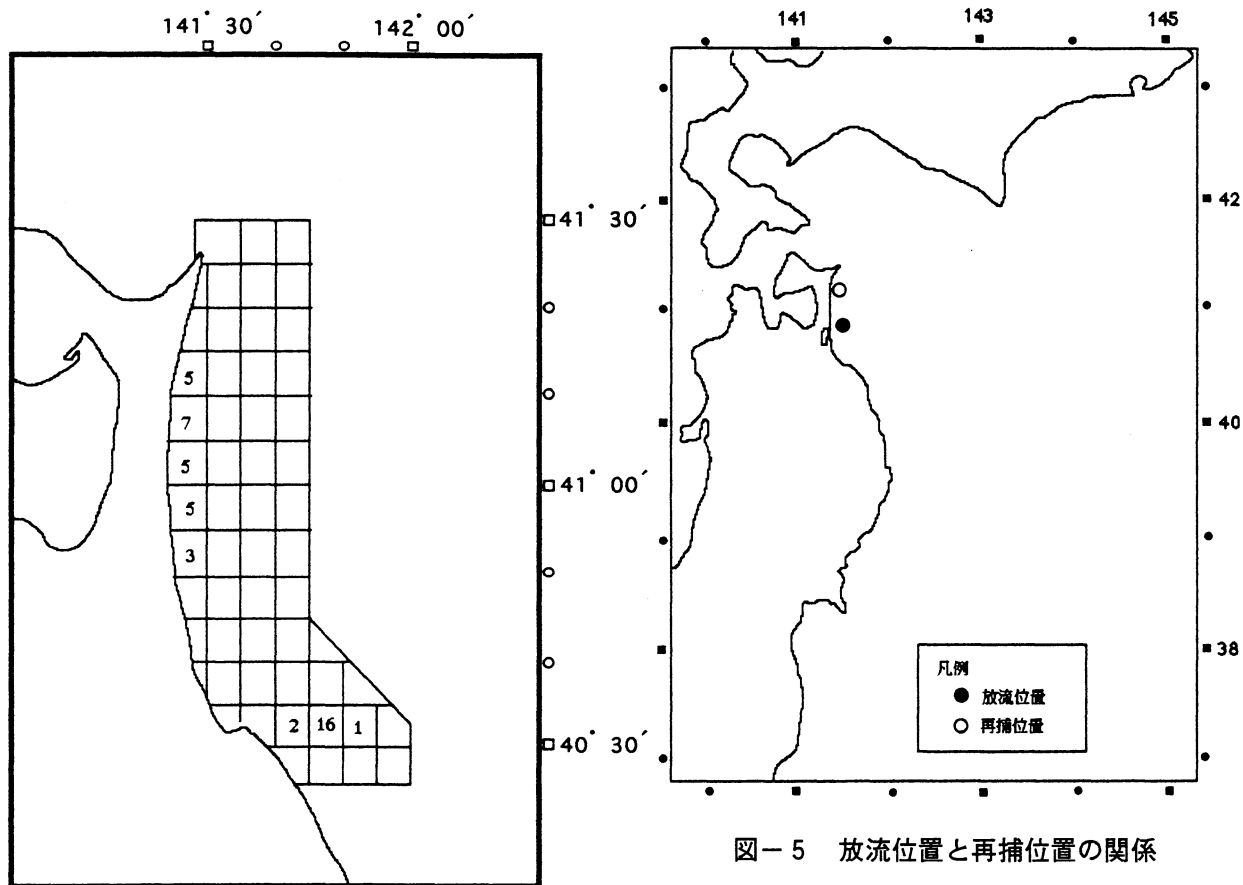


図-4 海域別放流尾数

考察

平成7年漁期は、本県太平洋沖合から岩手県三陸北部にかけて暖水塊が存在し、親潮第1分枝が岩手県南部に南下したため、水温環境が秋サケの来遊条件として悪く、北部の沿岸域でわずかに漁場の形成がみられたほかは、はえなわの操業には厳しい状況と考えられた。

このため、操業回数、漁獲尾数は操業開始昭和61年以来最も少ない結果となったほか、放流尾数もわずかに44尾にとどまった。

本県太平洋沖合でははえなわによって漁獲された秋サケ資源は、過去の標識放流の再捕状況から北部海域が青森県産資源主体、南部海域が岩手県産資源と青森県産資源の混成群と考えられたが、その量的関係の推定については、海況との関連で年変動が激しいと予想されることから今後さらに資料を集める必要がある。

また、表-3に昭和61年から太平洋において実施してきた秋さけはえなわ試験操業の実施状況一覧表を示した。

開始当初7隻で始まった試験操業は、平成7年には委託隻数95隻と近年増加傾向にあるが、実操業隻数は40隻前後で横這い状態となっている。

近年の秋サケは供給過剰による市況の低迷により、本漁業の経済性は低下してきているが、秋サケはえなわ漁業がスルメイカの漁閑期を利用して沿岸小型船によって操業されている実態を考慮すると、今後も本漁業の操業への潜在的な希望が強いことから継続的に調査を行っていく必要があると考えら

れる。

表 3 年次別実施状況一覧表

年 次	昭和61	昭和62	昭和63	平成 1	平成 2	平成 3	平成 4	平成 5	平成 6	平成 7	計
委 託 隻 数	7	18	38	56	64	64	101	86	94	95	528
出 漁 隻 数	7	13	30	37	40	26	39	41	46	28	279
延出漁隻数	81	99	411	420	172	129	477	336	252	78	2,377
延使用鉢数	1,573	1,404	5,558	5,053	2,881	1,291	5,078	3,555	2,857	684	29,250
漁 獲 尾 数	4,301	1,729	26,565	26,154	4,015	6,225	14,843	16,252	17,051	1,085	117,135
放 流 尾 数	52	15	255	343	138	169	235	190	225	44	1,622
再 捕 尾 数	2	5	5	6	6	12	1	2	6	1	45
再 捕 率	3.8	33.3	2.0	1.7	4.3	7.1	0.4	1.1	2.7	2.3	2.8
県 内 再 捕	1	1	1	5	1	6	1	0	4	1	20
県 内 河 川	0	0	1	3	0	2	0	0	0	0	6
県 外 再 捕	1	4	4	1	5	6	0	2	2	0	25
県 外 河 川	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1